浅井神社について

熊澤　良嗣 調

浅井山公園駐車場の北、県道 151 号に沿って大きな石灯籠と鳥居が見える。その横には「式内 浅井神社」と刻まれた標石が建っている。

鳥居を抜け、桜の大木が並ぶ参道を 100 メートルほど北へ進むと、大木が空を覆い厳かな雰囲気が漂う境内に到達する。向かって左手に君が代の歌詞にもある「さざれ石」が置かれ、その少し奥には石の手水盤と奇妙な形の井戸がある。

社殿は境内奥の重厚な岩盤の上に建っており、幅広のゆったりした石段を上がって参拝する。拝殿の格子越しに奥に目をこらすと、本殿の左右にも小さい社（やしろ）が見える。この社殿の下から古墳が発見されたため、「浅井神社古墳」の標柱が近くに建ててある。

参道が温故井池から続いていることから、浅井神社は池と深い関係があるのではないかと思われる。社史によれば浅井神社の祭神は水波売神（みずはのめのかみ）であり、代表的な水神とされる神である。創立は欽明天皇 24 年（563）で、平安時代の『延喜式神名帳』（927）には中島郡浅井神社と記載されている。浅井は普通葉栗郡の一部とみなされるので、中島郡と書かれているのは珍しい。『延喜式』は天正 14 年（1586）の木曽川大洪水――このとき木曽川の川筋が大幅に変わった――以前の編纂だから、中島郡としたのであろうか。

江戸時代、浅井神社は「八龍明神」と呼ばれていた。天保 12 年（1841）の東浅井村絵図にも「八龍明神」と記されている。「八龍」は水の神、何本にも枝分かれして流れる川を連想させる。「明神」という仏教的な神の称号は、この時期「本地垂迹（ほんじすいじゃく）」の考えが勝っていたことを想像させるが、明治維新になって「神仏習合（しんぶつしゅうごう）」が禁止されると、元来の呼称であった「浅井神社」に戻された。

拝殿に上がる石段の手前に一対の狛犬(こまいぬ)があって、その台座に「合祀記念」と刻んである。字銭瓶にあった神明(しんめい)社(祭神は天照大神)と字森下にあった塩竈(しおがま)六社大明神(祭神は塩土翁(おじ))が大正９年にこの神社に合祀された記念である。上述の、本殿左右にも小さい社が見えるというのがこれである。

神明社・塩竈六社とも元慶(がんぎょう)年間（880 頃）の創建とされる古い神社で、上述の東浅井村絵図にも描かれている。森一族の氏神であった神明社は現在の森医院駐車場辺りに見られる。社は「道山塚」古墳上に建ち樫や杉の大木に囲まれていたという。高橋一族の氏神であった塩竈六社は現在の浅井郵便局・東浅井氏子会館の辺りに見られる。こちらの社もやはり「樫山」と呼ぶ古墳上に建ち、周りは樫や椿や榊の森になっていたという。

道標石

浅井神社境内で注目すべきものとして、境内の真ん中から東に抜ける道沿いに置かれている「道標石」がある。丸い形をした自然石の表面に、「右いわくら　左あざ井」の字が刻まれている。東浅井地内にあったものを移したのだそうだが、あざ井（浅井）の文字が見えることから、高名な「浅井の林平さん」へ向かう人々の案内用に設置されたものであろうと思われる。江戸の末期から大東亜戦争（第二次世界大戦）前までは、全国から林平さんを訪れる患者の数が絶えなかった。村総出の道普請(みちぶしん)の日が年に１回あり、手入れが必要なところは標石を含めて補修をしていたという。

善光寺街道

信濃の善光寺には、推古天皇 10 年（602)、本田善光が仏像を背負って難波から信濃まで運んだという言い伝えがある。(※　善光が最初に仏像を安置したのは飯田市で、現在の

元善光寺（もとぜんこうじ）であった。その 40 年後に長野市にある現在の善光寺に遷座された。）

最初、善光が仏像を背負って通ったので「善光寺街道」と呼ばれた道は尾張の北部にあったという。（※　最古の善光寺街道というべきもの。その後、各地から善光寺へ詣でる街道を善光寺街道と呼ぶようになった。）

その道沿いにあって格好の休憩地であった玉の井、浅井、草井は尾張の三名水と呼ばれ、いずれも神社の境内地にあったと言われている。善光寺街道は木曽川が氾濫するたびに道筋が変化したと言われる。浅井の名水（浅井神社）の辺りをいつ頃通っていたかは不明だが、浅井町尾関地内には初期の善光寺街道と呼ばれる道の跡があったという。

名水「浅井」の所在を確認する資料は見当たらないが、恐らく地表に湧き出ている泉だったのではなかろうか。いつからか、地元ではそれが浅井神社の社殿下に埋もれていると信じられてきた。やがて浅井神社の瑞垣の修理が必要になり、昭和 38 年に考古学の専門家を招いて発掘が行われた。出てきたのは何と横穴式の石室で、社殿の下は古墳だったことが明らかになった。

＜参考文献：一宮市浅井町史、浅井風物考、浅井古今百話＞